



自著紹介

『コンピュータと表現：  
人間とコンピュータの接点』

(数理工学社、2015年3月)

平川正人

(島根大学総合理工学研究科教授)

「コンピュータを撲滅しよう！」  
… これでもれっきとした総合理工学部数理・情報システム学科の教員である私が、FMラジオ番組の中、公共電波にのせて過激に叫んだのは10年ほど前のこと。あの頃は今よりずっと若かった。

そのことはさておき、時計の針をさらに20数年ほど前に戻しましょう。私がまだ大学院生であった1980年代前半、米国のカーネギーメロン大学を訪れたときのことです。世の中ではまだ汎用大型計算機というカテゴリのコンピュータが幅をきかせていました。それは身の丈ほどもある大きな機械で、クーラーがよくきいた部屋の中央に据えられていました。個人でコンピュータを所有するというのは珍しく、一部のマニアのためのものでしかありませんでした。当時はマイコンと呼ばれていましたが、マイクロ（小さな）コ

ンピュータの略であり、マイ（my）コンピュータという考え方が認知されるのはもう少し後のことです。

さて、カーネギーメロン大学のとある部屋に連れていってもらると、そこには見たこともない機械がずらりと並べられていました。台数の多さもさることながら、画面の上には見たこともない“何か”が並んでいるではありませんか。驚いたことに、机の上の四角い物体を動かすと…なんということでしょう…その機械が反応して何やら画面の内容が変わるではありませんか！賢明な読者はすでに気がつかれたことでしょう。そうです、今日のコンピュータの姿がそこにあったのです。実はコンピュータをつなぐネットワークも備えられており、離れた場所のコンピュータとの間で情報交換することもできました。

信じられないかもしれませんね。

でも、今から30年以上も前のことです。コンピュータという代物はその頃からどれだけ変わったでしょうか。もちろん使い勝手のよい機能は追加されました。小型化が達成されたおかげで、ポケットやバッグに入れて持ち運び、いつでもどこでも自分の好きなタイミングで情報収集したり、友達とつながることもできるようになりました。それが大きな進歩でなくて何だ、という主張を否定するわけではありません。しかし、人間がコンピュータに向かって操作するというスタイルは、その頃から何も変わっていません、よね。

さて、ここで紹介する本書はコンピュータ関連分野のひとつであるヒューマン・コンピュータ・インタラクションについての教科書です。長いトンネルの中を進んできて、新たなステージに立とうとしているコンピュータ世界の一端を垣間見てほしいとの想いでまとめた一冊です。

「我々はコンピュータを売るのはない。我々が売るのはコンピュータでできることだ。」と元アップル社CEOのジョン・スカリーは言いました。冒頭のコンピュータ撲滅運動のメッセージは、まさにこれと同じことを訴えかけようとしたわけです。コンピュータを使っているとい

うことを人は意識することなく、したいことを考えておけば十分な日が近づいています。コンピュータ自身が賢く振る舞い、我々の先回りをして気の利いた「お・も・て・な・し」を実現することだってできるようになります。コンピュータがロボットのような身体を持ち、実際に近寄ってくるだけではありません。皆さんが座っているテーブルが、ある時はディスプレイ代わりになるといったような時代も、それほど遠い先ではないでしょう。

コンピュータが機械であるということを考えれば、どんな形また機能にも作り手の考えひとつで自由自在に仕上げることができます。当然ですが、人間を中心に据えたシステムデザインをしようとするれば、コンピュータ技術はもちろんのこと、心理学、社会学、デザイン、医学など、ありとあらゆる知恵を結集する必要があります。一抹の恐れは抱きつつも、果敢に挑戦することで新たな展開が拓けることを期待して同書を取りまとめました。その意味で、情報工学を学ぶ学生に限らず、これまで縁のなかった人たちにも、是非手に取っていただけたらと思っています。

技術的内容とは別に、本の構成に

も気を配りました。49の項目はすべて2ページ見開きとし、それらを7つのセクションに編み込みました。巻頭から巻末まで順番に読み進めてもらっても結構ですし、気の向いた項目を自由気ままに選んで読んでもらうこともできるようにしました。比喩的にいえば、ソファにゆっくりと身をまかせながら、曲の作り手の想いに身を委ねてレコードの最初から最後まで聴き込むもよし、あるいは

は軽やかな風を身にまといながら、メディアプレイヤーからランダムに選曲されて流れ出す音楽にあわせてステップを踏むもよし、といったところでしょうか。図書館で見つけたならば、是非とも手にとって、まずはどの頁でも構いませんので開いてみてください。新たな世界への入口がそこに見つかることを期待しています。

